

弊社の基礎技術は日本の「ものづくり」

谷口 和美 (たにぐち かずみ) 谷口ヒーターズ株式会社 代表取締役

要約 近年、世界では持続可能性を主題として掲げた SDGs への取り組みが進められているが、それ以前に、日本人は古くから「ものづくり」にエートス（道徳的性格）を有しており、技術とその倫理を文化として伝承するとともに、それを継続させる努力を怠らなかつた。一方、グローバル化のデメリットで、現代日本の「ものづくり」の価値観はそこから離れつつある。SDGs の目標にもこのデメリットで発生する諸問題の是正が数多く含まれていることに注目したい。本稿では、弊社の紹介として創業者のエピソードを交えながら、日本の「ものづくり」が、技術の伝承のみならず、「人が生き続けることのできる世界づくり」に寄与し、さらに地球環境保護に繋がるよう、その願いを記す。

はじめに

弊社の創業者初代は《戦艦大和》に乗船して艦内ヒーターの保守保全を担当していた。戦中前後に設計図を含め多くの記録が破棄され残されていないそうだが、《大和》はその時代の最先端技術の粋を集めた実装だったとされている。洋上では火気が制限され、多くの設備は「電化」されていた。温度が上がると危険な弾薬庫を冷却するためのシステムを空調設備に転用して士官居住区の冷房に利用するなど、熱の有効利用が積極的に活用されており、さらに、航海中の省資源、運用や保守での安全管理も非常に重要であった。

初代が《大和》に乗船していた時の話を語ることは無かったが、取扱説明書などの説明に記される弊社の用語にその片鱗が示されている。例えば、液中加熱ヒーターが液に浸されずに加熱されてしまうことを一般的には「空焚き」や「空焼き」と称されるが、火気が厳しく制限されていた艦内で焚いたり焼いたりすることはあり得ず、3000人以上の乗員の食事を賄う大型炊飯器で飯を「炊く」ときの事故であった「空炊き」以外の言葉の選択肢は無かったのである。今も弊社では「空炊き」と称している。また、現在ではヒーターの液面下限線を示す位置を「レベルライン（ヒーター液面下限ライン）」と改称しているが、40年前までは、それを「吃水線」と呼んでいた。「吃水線」は船舶用語で、静水上に浮かんだ船舶の水面に接する分界線のこと、船舶が水上にある際に船体が沈む深さ、すなわち船体の一番下から水面までの垂直距離のことを指

す。初代の経験が、こういった用語を選ばせていた。

終戦後の昭和 22 年、初代は当時の家電器具や電気コンロなどの修理人工場として仕事を始めた。鍋物をするように鉄のタンクを炭火で加熱をしていた当時のメッキ工場からの依頼で大型の電熱器を製作。その後、横須賀海軍学校の元教官や先輩が集まり、石英ガラスメーカーを定年退職した先輩が石英管を持ってきたことから、耐酸性の石英でメッキ液中に入れる投込ヒーターを開発して特許を取得。その後、注文が増え、品川区大井町の中古の大正期木造 3 階建ての初めての工場は、海軍体操から一日がスタートする液加熱投込ヒーター専門製造工場、株式会社谷口製作所になった。製造へのこだわりは部品にいたるまで半端ではなく、例えば、当時特許を取得したヒーター用自動時限発停装置（のちの自動液温度調節器）は防衛省認定のヒューズを使う設計仕様であった。このこだわりの所以は、乗船時代の厳しい安全管理にあったであろう。その意志は引き継がれ、安心安全を基礎にした耐久性（耐薬など）・省エネ・省資源・熱の有効利用は、現在も弊社の重要テーマである。

1. 日本人の「ものづくり」の気概

戦後の高度経済成長の時代を作り出したのは日本人の伝統的な「ものづくり」への意気込みであると言われる。日本では古くから「自ら作る」ことへのこだわりが強く、さらにそれを後進に伝承することを勧奨していた。製造は単純労働ではなく、精神性の高い